

一、葛巻昌興雪竹の辭

袖うちにはらふ陰もなき雪の夕暮、柴の屋にかへり侍るとて、流水にたちつゞきたる篁のほとりを過行き侍しに、目をふる雪にをれふしたる吳竹の、あるは水にひたゝり、あるはうづもれて、さこそとばかりおしてしるのみなりければ、さてもとて詠めやりたるに、かたへには又みさをつくりて打そよめきたり。いかなれば降りくらしたる雪の中にももれてかくは侍りけん。またいかなればおなじ砌に力なくをれふしたりけん。細きにやといたはれば、猶ほそきもよくたてり。しかも細からぬもをれふしたりけり。木陰などのたつき有るにてもなし。ふる雪のかゝらざるにてもなし。貞節はおなじく具したり。ひたふるに下折とならむはあやしからずや。かれはしたをれとなり、これはみさをなかり、いかにぞやおもひとき難し。しばらく心におきて、知らむ人にとふべしや。

心なくつもらば雪にあすもまた

をれふす竹のうきふしやみん

右は元禄五年壬申冬、葛巻權佐昌興所感あつて此辭をの

べ、竹田忠張に寄せたり。余十八歳の時也。昌興爲人忠實にして義勇あり。忠張年老て氣慨あり。余弱冠の時といへども此辭を見て、有所爲て作れる事を知りぬ。然るに忠張の答る辭は、其意を察識せざるものごとし。但しれども却て昌興が爲人を抑へて、不解ものまねせしものか。是老成人の用心なるもしらす。翌年の春昌興終に罪を獲て、北溟の囚人となれり。嗚呼哀哉。往事を追感するに三十八年を過ぎぬ。反故紙中より搜出しこゝに記し得るもの也。

幾日ともなく降つむ雪の爲に、砌の篁あるは力なく打臥し、あるは操作りて己が葉風に打はらひなどすめるを、貞節はひとしき物から、いかにとあやしみおぼす人ありて、弱にや強にやと御目とどめて、ふかくたどられ給ひけれど、その剛柔にもよらで、只様々の姿なめり。かゝる上をかいつらね、雪竹の辭と名付け、妙なる詠歌を打そへて給ひぬ。返々戴き、誠に心なき住居の柴の戸推開て、彼緑竹の白雪を打詠め、又は目を閉侍れども、更に定むべき方なし。なよ竹の心地してをるべくもあらずと云置しにもたがへり。

また宗祇法師

雪をおもみ弱きにかゝる柳かな

その枝は弱きにこそかゝりけめ、こたびは半おきぬ。元來雪も心なく、竹も心なく、まして造化の私は聊あるまじけれど、世上の榮辱浮沈、皆さるべきにこそ侍るめれ。はては人にとへどもしらす、我猶不知とより外のことなし。

忠 張

折臥もをれぬも雪の姿にてそよげば本の庭の青竹

一、小瀬桃溪詩作の力量

正徳三先生生祭の内

桃溪詩作殊の外あがり申候。新井氏も褒美、當地などにて詩を好み申候得共、是程に作り申人は難得旨被申候。天然と俊逸成に有之候。只恨むらくは三百篇、楚辭の趣をば得不被申候。常に好み被申所、唐以後にて候故、風雅の体に遠く御座候。三百篇、楚辭より出申詩は、格別高き物に御座候。其段新井氏も被申候。柳子厚が詩など毛詩楚辭の風體を得申第一と存候。李杜などは力量有之故、自分に轉化仕候故、却て見えかね候。五月十八日。

一、新井君美の詩論

同年閏五月九日坂井氏詩作儀被仰下通致承知候。毛詩・楚辭の趣を得申迄は、よほどいまだ段有之儀に存候。急には難成と存候。柳

子厚が詩に寄有故園思。瀟湘生夜愁と申句を、先日新井氏にて吟じ申候て、此起句なども詩の遺意を得申と申候へば、新井氏笑て居被申候。新井氏被申は、詩に裝點法と申事有之、一字にて格別はつきりといいたし、詩の音響を十倍仕事有之候。此前湯治いたし、伊豆の山を越え申時、高山の上にて百里を一望仕候。其景氣もとより勝れ申候所に、林中より鹿二疋出候て、忽然として去り申候。其節下を見おろし候へば、遙の下に驚舞ひ申を上より見申候。青天に驚舞ひ申躰、凡骨をはなれ申景色にて候。此驚と鹿にて、此山の景氣十倍いたし候様覺え、今以わすれ不申候。是則裝點法にて候。鹿と驚は、當分外よりのかり物に候へ共、是にて山の景氣を添申候へば、此二物を以てよそほひ申といふ物にて候。又月なれば月になづみ花なれば花になづみ候て、花月の上ばかりにて形容いたし候ては、よくいひおほせ候ても、精神はとくにぬけ申候。名人は意の用様格別に